

詩編 第118編 29節

「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」

歌は1節から始まり、29節で閉じる。その間いろいろな経験をしていることに疑いの余地は無い。山あり谷ありの人生を経験したであろう。闇と光の経験をしたはずである。悲しみと喜びをも経験したはずである。谷底ではうずくまり、闇では手探りで歩き、悲しみで涙することがあったはずである。それでも、訪れた山では深く呼吸をし、光の中では一望できる風景を楽しみ、その喜びを友と分かち合うこともあっただろう。

しかしながら、谷底は再び襲い、闇は再び包み、悲しみが襲う日は絶えることが無い。その日々には、その時には、まるで足元がすくわれ、底が抜け落ちる不安と恐怖に立たされる。それでも立ち続ける。立っているから、ありとあらゆる人生の出来事を経験している。どのような状況下にあっても立ち続け、呼吸し続けている。この詠い手も人生のあらゆる出来事を経験して来た。その時々を呼吸して来た。

その旅路で生まれた最後の歌が、「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」旅路の終わりに向き合ったのは、旅人である自分ではなかった。旅を支え導いてくださった主を見上げるだけだ。旅の総決算者である主を仰ぐ。

2023年1月23日